

#005 お天気雑記帳

う りゅう じま

瓜生島伝説

大分県の別府湾にあった島が地震で沈んだという伝説があります。島が沈む話は、伊勢湾の鯛島、若狭湾の冠島、長崎五島の高麗島など全国各地にあるのですが、あやしげな話が多い中で、この瓜生島伝説だけは種々の史料から島(砂州)の存在が確認され、しかも、沈んだ原因が、慶長元年(1596)に発生した地震であると特定されています。『理科年表』には、次のように紹介されています。

1596 9 1 (慶長1 閏7 9)M7.0

豊後:前月より前震があったらしい。この日の大地震で高崎山など崩れ、八幡村柞原八幡社拝殿など倒壊。海水が引いた後大津波が来襲し、別府湾沿岸で被害。大分などで家屋ほとんど流出。「瓜生島」(大分の北にあった沖の浜とされる)の80%陥没し、死708という。

豊後の地にキリシタン大名の大友宗麟がいた関係で、この瓜生島(沖の浜)は外国船の寄港地としてにぎわっており、付近にキリシタンも多く住んでいました。フロイス『日本史』に、信者から聞いた地震と津波の様子が載っています。島の家々が津波に流されたこと、年貢を徴収する秀吉の船団が全滅したこと、津波が大野川を遡ったことなどが記されています。

府内からマイル三哩(4.8km)離れて、沖ノ浜と呼ばれる大きな村があります。多くの船の寄港地であり揚陸地です……夜間突然あの場所に風を伴わず海から波が押し寄せて来て、非常に大きな音と大きな力で、その波は町の上に7ブラッチョ(4m)以上も立ち上った……気狂いじみた激烈さで海はマイル一哩(1.6km)も一哩半(2.4km)以上も陸地を浸食し、波が引いたときには沖ノ浜の町には何も残っていませんでした……沖ノ浜には非常に多くの船隊が停泊していました。その大部分は太閤のもので、これらの船は王国の徴税のため豊後に来ていました……これらの船は一隻さえも助からず、同一場所で砕け、全部が沈んでしまった……この地震によって五千の家屋があったと言われる町が、二百そこそこになった……この地震のとき大河(大野川、乙津川か)を通って海が三哩(4.8km)も入りこみました。

1977年に瓜生島調査会による学術的調査が行われました。超音波探知機による調査で、海底地層の乱れが発見され、大規模な地すべりの跡と断層が確認されました。その後、1980・81年に大分大学による調査が行われて多くの断層群があることがわかり、1985年の東京大学の調査で約500～400年前に動いた断層が発見され、さらに1989・90年の東海大学の調査で不自然な砂の堆積層が見つかりました。その後の文献・現地調査で、大分市中心部の大分県庁付近で津波高5.1m、浸水深2mの津波があったことも確認されています。

これらの調査から、大分川河口付近の海に突き出た島状の砂州が、地震による液状化で地すべりを起こし、その後の波による浸食によって完全に消滅したという説が有力になりました。

倉庫や工場が立ち並ぶ、大分市臨海部の豊海地区の埋め立て前の地形は、沿岸部は水深1m未満の遠浅な浜で、約800m沖から急に深くなっていました。この豊海地区付近に瓜生島(沖の浜)があったと考えられています。



2011年の東日本大震災の後、歴史地震の関心が高まり、瓜生島伝説の再調査が行われました。

別府湾で「閏7月9日20時」「閏7月12日16時」「閏7月13日0時」に3回の地震があったようです。9日・12日の地震は、別府湾付近を震源とし、「慶長豊後地震」と呼ばれているものです。13日の地震は「慶長伏見地震」と呼ばれているもので、関西を震源とし、大分の被害はありません。9日と12日の2つの地震を比較すると、①大分の震度はVまたはVIでほぼ等しいものの、京都・鹿児島などの記録から9日のほうが大きな地震であったこと、②9日の津波よりも12日の津波による被害のほうが大きかったこと、がわかりました。これらのことから、12日の地震は9日の地震の最大余震で、9日の地震で中規模の津波が発生し、さらに12日の地震の数時間後に地すべりが起きて大きな津波が発生したと考えられています。

気象予報士(株)富士ピー・エス顧問 松嶋 憲昭